

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第265集

芝宮遺跡群

南上中原遺跡Ⅱ

長野県佐久市長土呂南上中原遺跡Ⅱ発掘調査報告書

2019. 11

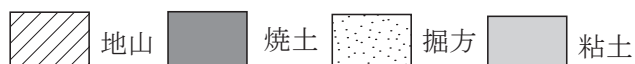
佐久市教育委員会

例 言

1. 本書は、有限会社 田園不動産が行う宅地造成工事に伴う芝宮遺跡群南上中原遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。
2. 調査原因者 有限会社 田園不動産 代表取締役 田中 明
3. 調査主体者 佐久市教育委員会
4. 遺跡名及び調査面積 芝宮遺跡群 南上中原遺跡Ⅱ (NSMⅡ)
156㎡
5. 所在地 佐久市長土呂字南上中原763-1他
6. 調査期間 令和元年6月3日～12日(現場発掘作業)
令和元年6月13日～令和2年3月(報告書作成作業)
7. 調査担当者 富沢一明
8. 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

1. 遺構の略記号は、住居址(H)・土坑(D)である。
2. 挿図の縮尺については、挿図中にスケールを示した。
3. 遺構の標高は遺構ごとに統一し、水系標高を「標高」とした。
4. 土層の色調は、1988年版『新版 標準土色帖』に基づいた。
5. 挿図中のスクリーントーンは以下のことを示す。



発掘調査状況

目 次

例言・凡例・目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地
2. 調査体制
3. 調査日誌
4. 遺構・遺物の概要
5. 標準土層
6. 調査の方法

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址
2. 土坑
3. 調査の成果

写真図版
抄 録



第1図 南上中原遺跡Ⅱ位置図

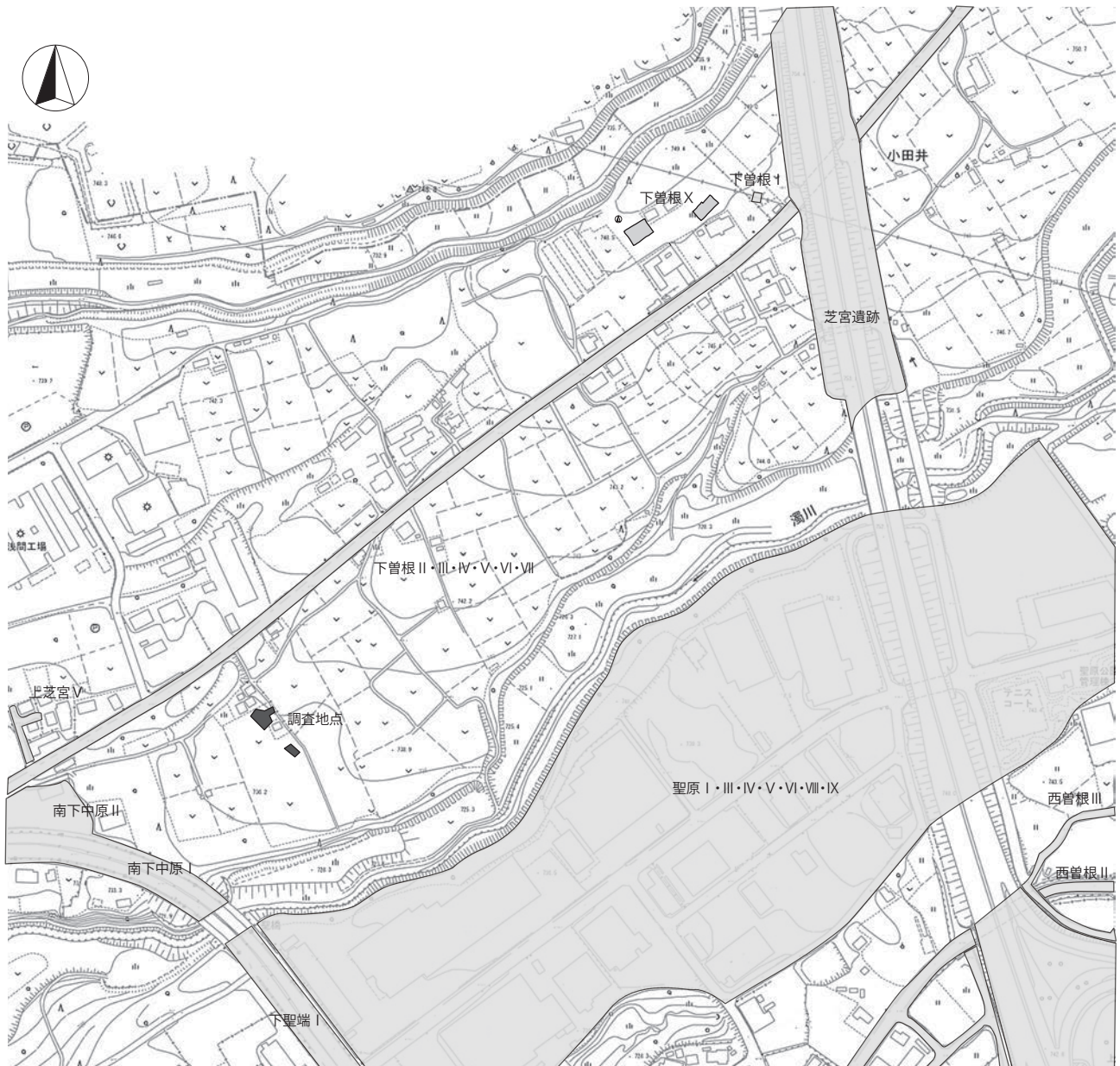
第 I 章 発掘調査の経緯

1. 経過と立地

南上中原遺跡Ⅱは、佐久市長土呂に所在し、芝宮遺跡群の南西よりに位置する。遺跡は、濁川を望む台地上に立地し、台地周辺の海拔は730m前後を測る。

本遺跡の周辺では、上信越自動車道路をはじめとし各種開発により発掘調査が行われている。特に、上信越道の調査では幅2.6～9.6m、深さ2.2mの大きな溝が検出され、海獣葡萄鏡が出土し注目を集めた。また、聖原遺跡においては古墳時代から平安時代の竪穴住居址が900軒以上調査され、皇朝十二銭や石製私印、甲斐型土器の「佛鉢」などが出土している。

今回、遺跡群内において有限会社田園不動産により宅地造成工事が計画され、市教育委員会に文化財保護法93条の届出があった。市教育委員会では試掘・確認調査を行った結果から遺跡の保護措置がとれない道路部分を中心に、記録保存目的の発掘調査を行うこととなった。



第2図 周辺遺跡位置図

2. 調査体制

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長	糊澤晴樹						
事務局	社会教育部長	青木	源						
	文化振興課長	東城	洋						
	企画幹	吉田	晃						
	文化財調査係長	山本秀典							
	文化財調査係	小林真寿	羽毛田卓也	富沢一明					
		上原学	久保浩一郎						
	調査員	赤羽根篤	浅沼勝男	小林妙子	堀籠まゆみ				
		堀籠保子	柳澤孝子	横尾敏雄	依田好行	中澤	登		
		羽毛田利明	田中ひさ子						

3. 調査日誌

平成 31 年 3 月 19 日	有限会社田園不動産より土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。
3 月 20 日	長野県教育委員会へ市教育委員会より 30 佐教文振第 1567-2 号土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知について (副申)
3 月 25 日	長野県教育委員会より 30 教文第 7-2071 号にて周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について (通知)
令和元年 5 月 22 日	有限会社田園不動産より埋蔵文化財調査費概算見積依頼が提出。
5 月 24 日	有限会社田園不動産と市教育委員会により埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結。
6 月 3 日～ 12 日	記録保存目的による開発対象地の発掘調査を行い、引き続き報告書作成作業を行う。
11 月	埋蔵文化財調査報告書を刊行する。
令和 2 年 3 月	記録類・出土品を整理保管しすべての業務を終了する。

4. 遺構・遺物の概要

遺構	竪穴住居址	3 軒 (古墳・奈良・平安)	土坑
遺物	土師器・須恵器	(坏・甕)	

5. 標準土層

今回の調査地点は南西方向に僅かに傾斜する台地上で、基本層序は 3 層に分かれる。Ⅲ層上面が遺構確認面である。確認面深さは地表より 30～50cm ほどであった。

第Ⅰ層	10YR4/1	褐灰色土	耕作土でしまり弱い。
第Ⅱ層	10YR3/3	暗褐色土	しまり・粘性ややあり。 軽石と小石を含む。
第Ⅲ層	10YR5/6	黄褐色土	浅間 P 1 層



南側調査状況 (北より)

6. 調査の方法

遺構調査・遺構測量

住居址は均等に4分割し、対面する2区画を掘り下げ土層の観察・記録を行った後完掘し、床面を精査し、柱穴・カマド等を適宜分割し、土層の観察・記録を行い、最終的に平面の記録を行った。

遺物は分割した各区毎に取り上げ、床面上の遺物に関しては連続するNoを付け3次元の記録を行い取り上げた。土坑は長軸方向に沿って2分割し、半裁により土層の観察・記録を行った後完掘した。遺物は遺構Noで一括した。溝址は短辺方向に任意の場所で区分し、土層を観察・記録した。遺物は区毎に取り上げた。遺構外の遺物はグリット毎に取り上げた。平面図・断面図ともに調査区内に設定した基準杭を利用した遣り方測量により調査担当及び調査員が実施し、縮尺は1/20を基本とした。

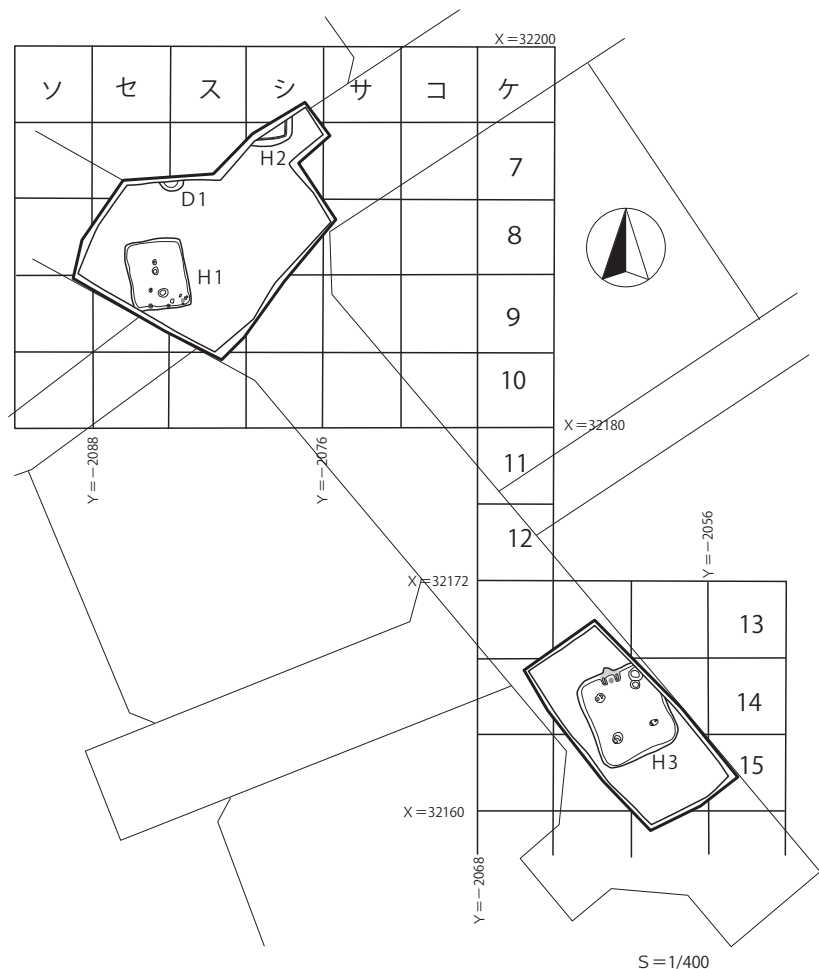
遺構・遺物の整理等

遺物洗浄は竹ブラシを用い手でおこない、室内で乾燥させた。注記は白色のポスターカラーにより行い、薄めたラッカーをその上から塗布した。遺物接合はセメダインCを使用し、遺物復元の際の充当材はエポキシ系樹脂を用いた。遺物実測は手取りで行った。遺物の保管に際しては報告書を台帳として、報告書掲載遺物と未掲載遺物に区分し、コンテナに分類ラベルを貼り収蔵庫に収納した。図面は遺構を1/40で修正、遺物を1/1で実測し、それぞれ仮図版を作成した。

写真・報告書

現場での写真は、デジタル一眼レフカメラによるRAW画質モードと、35mm一眼レフカメラによるカラーリバーサルで同一カットを各々記録した。

遺物写真はデジタル一眼レフカメラで撮影し、EPSデータ形式で報告書に使用した。報告書挿図はアドビ社製の「イラストレーター」で作成し、表についてはマイクロソフト社の「エクセル」で作成した。写真・拓本はアドビ社製「フォトショップ」により補正加工を行った。これらを最終的に「インデザイン」により頁単位で編集し、印刷原稿とした。



第3図 南上中原遺跡Ⅱ調査全体図

第Ⅱ章 遺構と遺物

1. 竪穴住居址

(1) H 1 号住居址

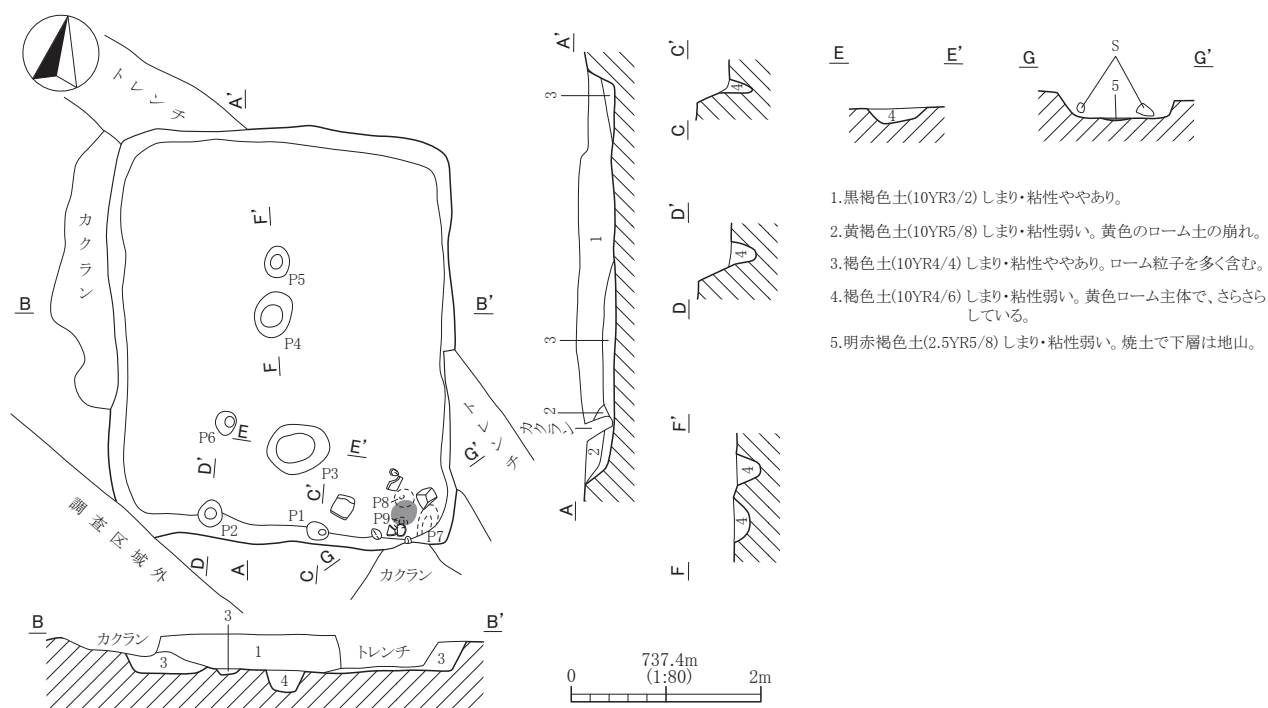
本址は北側調査区で検出された。住居南西コーナー部分が一部調査区外となるが、ほぼ全容を調査した。

形態は長方形で、長軸方位はN-9°-Wを測る。規模は南北長 4.04 m、東西長 3.34 m を測る。住居床面積は 13.2㎡である。壁の高さは西壁南よりで 0.39 m を測る。ピットは掘方時も含め 9ヶ所で検出され、その位置から P 1 と P 2 は入口施設の穴と考えられる。規模は P 1 は径 0.23 m・深さ 0.31 m、P 2 は径 0.29 m・深さ 0.36 m、P 3 は径 0.68 m・深さ 0.13 m、P 4 は径 0.49 m・深さ 0.20 m、P 5 は径 0.33 m・深さ 0.26 m、P 6 は径 0.26 m・深さ 0.12 m、P 7 は径 0.35 m・深さ 0.08 m、P 8 は径 0.19 m・深さ 0.05 m、P 9 は径 0.11 m・深さ 0.04 m を測る。床は軟質で顕著な硬化面は検出されなかった。

カマドは住居南東コーナー部で検出した。構築方法は袖部分が転石と粘土で被覆し形を整えていたと考えられるが、原位置を留めている構築材は無かった。火床部はよく焼けており、焼土の厚みは 0.02 m を測る。

出土遺物は覆土及びカマドを中心に出土したが非常に少なかった。特にカマド周辺からは器厚の厚い土鍋状の鉢片が出土している。その他には須恵器坏片等が出土しているが覆土中からの出土である。

本址は出土遺物が少なく、所産時期を確定できないが、カマド位置が南東コーナーであることや、厚手の土鍋状の鉢片が出土している事から 10 世紀後半から 11 世紀代に位置づけられると考えられる。



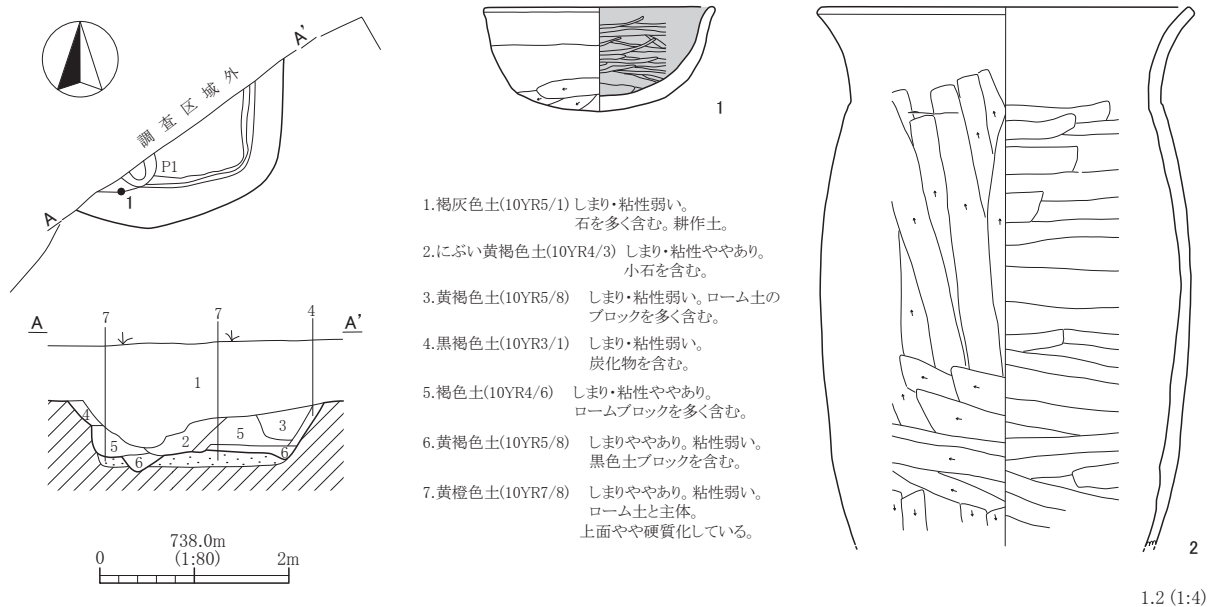
第 4 図 H 1 号住居址実測図

(2) H 2 号住居址

本址は北側調査区東端で検出された。住居址の大部分が調査区域外となり、住居南東コーナー部分のみの検出となった。検出された部分の規模は、東壁 0.76 m、南壁 1.26 m である。壁高は南壁で 0.60 m を測る。壁直下には壁溝が巡っていた。ピットは 1 か所確認され、規模は径 0.44 m、深さ 0.16 m を測る。床は貼床が施されており、やや硬質化が確認された。

出土遺物は 1 が壁際から、2 が覆土中よりそれぞれ出土した。1 はほぼ完形の土師器坏で、内面黒色処理が施され、粗いミガキが確認できる。2 は土師器甕である。

本址はこれらの出土遺物から古墳時代後期に位置づけられると考える。



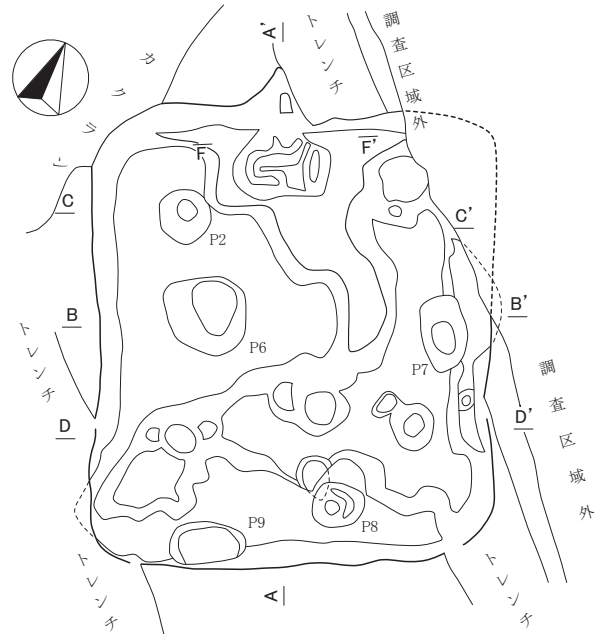
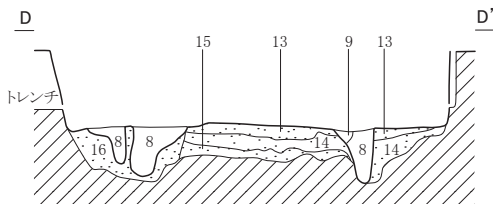
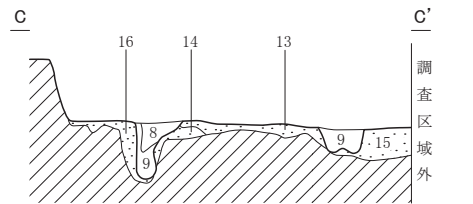
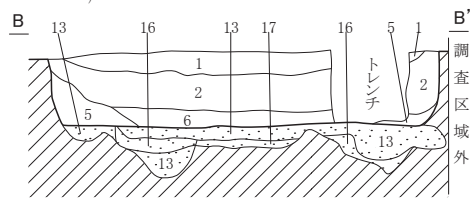
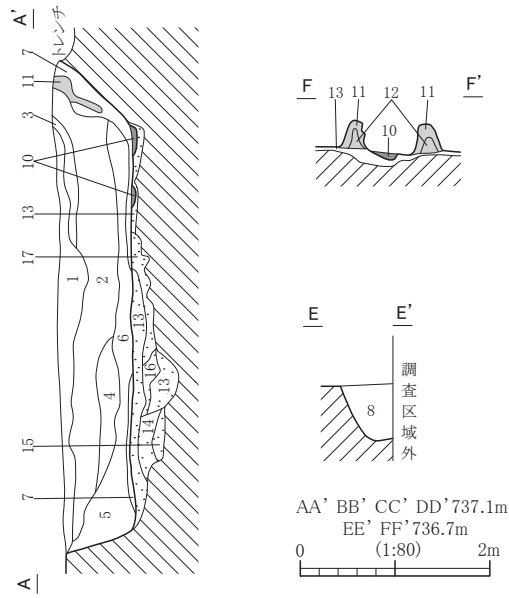
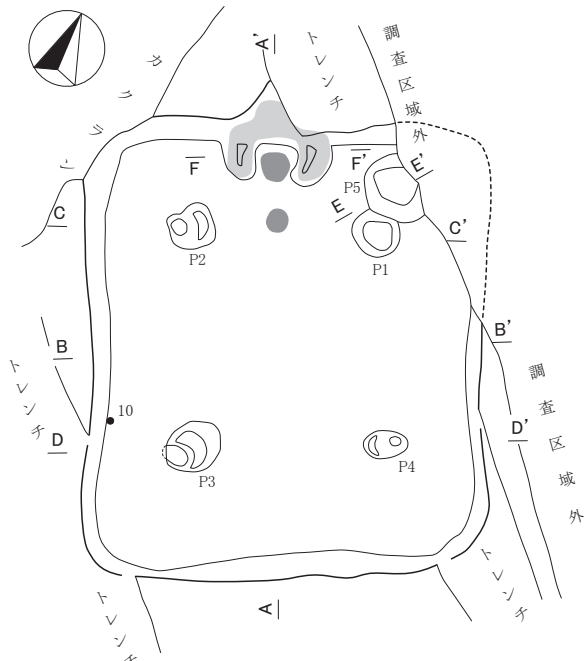
第 6 図 H 2 号住居址及び出土遺物実測図

(3) H 3 号住居址

本址は南側調査区で検出された。住居址の北東コーナーを除いてほぼ全容を調査した。形態は長方形で、長軸方位は N - 22° - W を測る。規模は南北長 4.34 m、東西長 3.74 m を測る。住居床面積は 16.6㎡ である。壁の高さは南壁西よりで 0.83 m を測る。ピットは掘方時も含め 9 ヶ所で検出され、その位置から P 1 ~ P 4 は支柱穴と考えられる。規模は P 1 は径 0.50 m・深さ 0.26 m、P 2 は径 0.46 m・深さ 0.60 m、P 3 は径 0.62 m・深さ 0.55 m、P 4 は径 0.46 m・深さ 0.60 m、P 5 は径 0.78 m・深さ 0.59 m、P 6 は径 0.86 m・深さ 0.35 m、P 7 は径 0.76 m・深さ 0.37 m、P 8 は径 0.56 m・深さ 0.36 m、P 9 は径 0.82 m・深さ 0.19 m を測る。床は硬質で、カマド前面は特に硬質化していた。貼床は厚く 0.36 ~ 0.52 m の厚みで貼られていた。また、本址の床下には粘土を採掘したと考えられる部分が検出され、東壁や南西コーナー部では住居壁よりも外側に掘り込んでいる部分が確認された。

カマドは北壁中央部で検出された。白色の粘土で袖部と煙道部は構築され、煙道部は一部トンネル状の煙出し部が残存していた。袖部は 0.30 m 程の高さで残存していた。火床部はよく焼けており、0.06 m の厚みを測る。

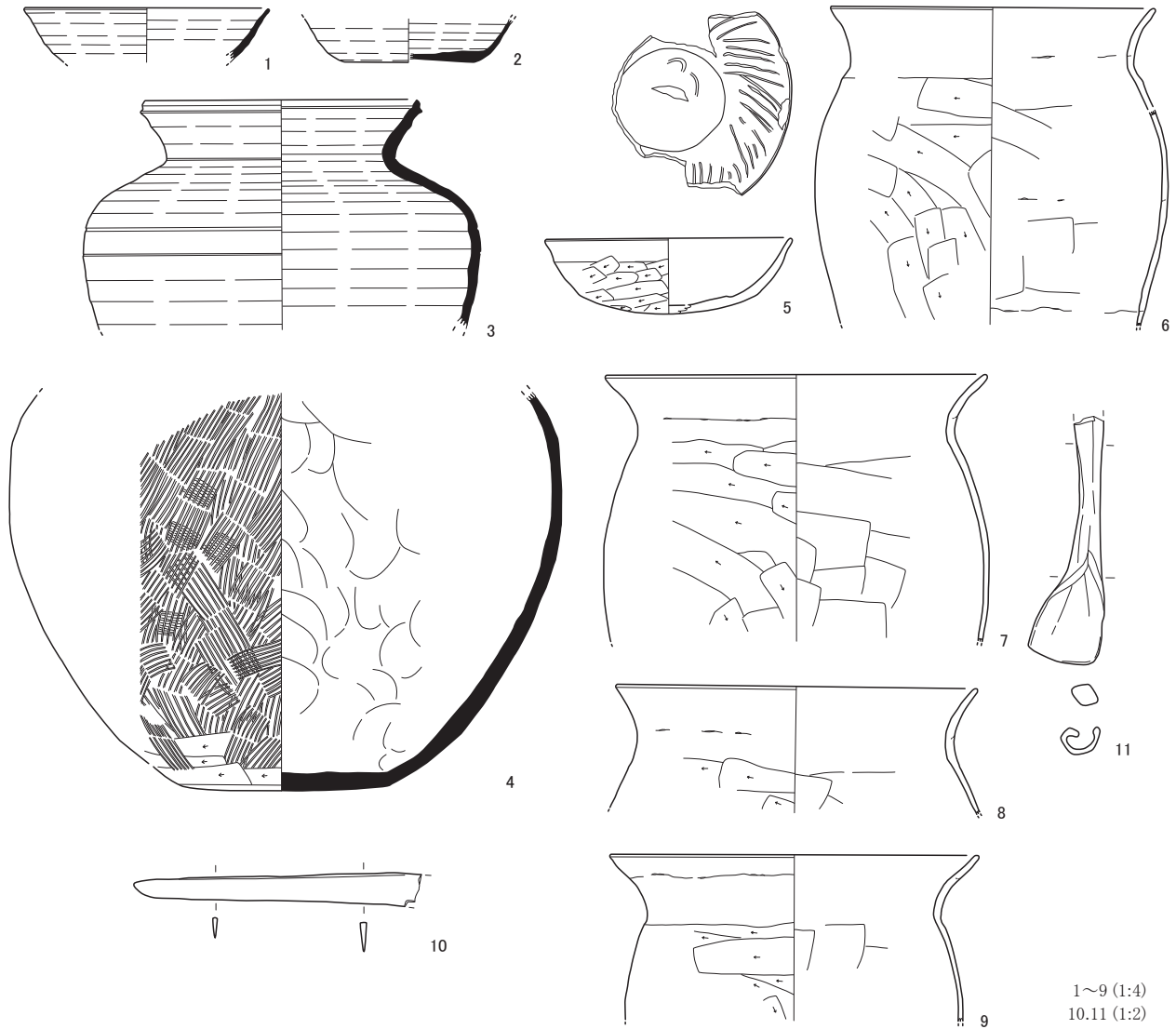
本址からの出土遺物は覆土やカマドを中心に出土した。1 と 2 は須恵器坏である。3 と 4 は須恵器甕で、4 はカマドの粘土から出土した。5 は土師器坏で見込み部に螺旋状の体部内面に放射状のそれぞれ暗文が施されている。6 ~ 9 は土師器甕で、いずれも「武蔵甕」の範疇で捉えられる。10 は刀子の切っ先部分と考えられる。11 は用途不明の鉄製品で、軸部は棒状であるが先端部を板状に広げ



1. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性弱い。小石を含む。
2. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性ややあり。軽石・ロームブロックを含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR7/4) しまり・粘性ややあり。
ピンクの粘土ブロックを多く含む。
4. 褐色土(10YR4/4) しまり・粘性ややあり。粘土ブロックを含む。
5. 黒褐色土(10YR3/1) しまり・粘性やや弱い。小石を含む。
6. 暗褐色土(10YR3/3) しまり・粘性あり。黒色土ブロック・軽石を含む。
7. にぶい黄褐色土(10YR7/4) しまり・粘性ややあり。
ピンクの粘土ブロック・焼土粒子・炭化物を含む。
8. 黒褐色土(10YR3/1) しまり弱く、粘性ややあり。

9. 黄褐色土(10YR5/6) しまり・粘性あり。黄色のローム粒子を多く含む。
10. 橙色土(5YR6/8) しまり・粘性弱い。よく焼けた粘土層。
11. 橙色土(2.5YR7/8) しまり弱く、粘性あり。ピンクの粘土。
12. にぶい黄褐色土(10YR7/3) しまり・粘性あり。ローム土の粘土化した土。
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3) しまり・粘性あり。ロームブロックを多く含む。
14. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性あり。ローム粒子を含む。
15. にぶい黄褐色土(10YR5/4) しまり・粘性ややあり。
ピンクと黄色のローム粒子を含む。
16. にぶい黄褐色土(10YR6/3) しまり・粘性やや弱い。
ピンクのローム粒子を多く含む。
17. 黒色土(10YR2/1) しまり・粘性弱い。灰と焼土を少量含む。

第7図 H3号住居址実測図



第8図 H3号住居址出土遺物実測図

である。本址はこれらの出土遺物から8世紀中葉頃の所産と考えられる。

2. 土 坑

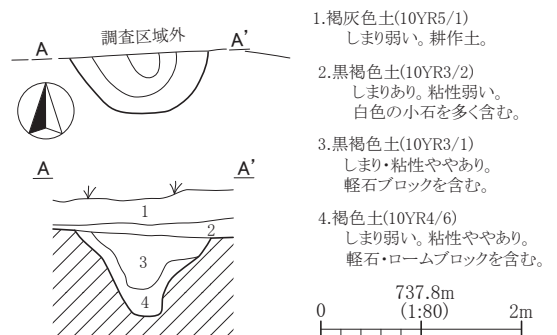
(1) D1号土坑

本址は、北側調査区の北より検出された。北側が調査区域外となる。規模は幅が検出部で1.30m、深さは最深部で確認面より0.82mを測る。出土遺物は無く、所産時期も不明である。

3. 調査の成果

今回の調査では古墳～平安時代の3時期にわたる竪穴住居が発見された。北に接する市道建設時の調査と合わせると各時期の集落域を考察する上で、貴重な成果といえる。

今後、周辺部の調査事例が増せばより具体的な集落像が描けるであろう。



第9図 D1号土坑実測図

図版 1



H 1号住居址



H 1号住居址カマド



H 2号住居址



H 2号住居址出土遺物



H 3号住居址



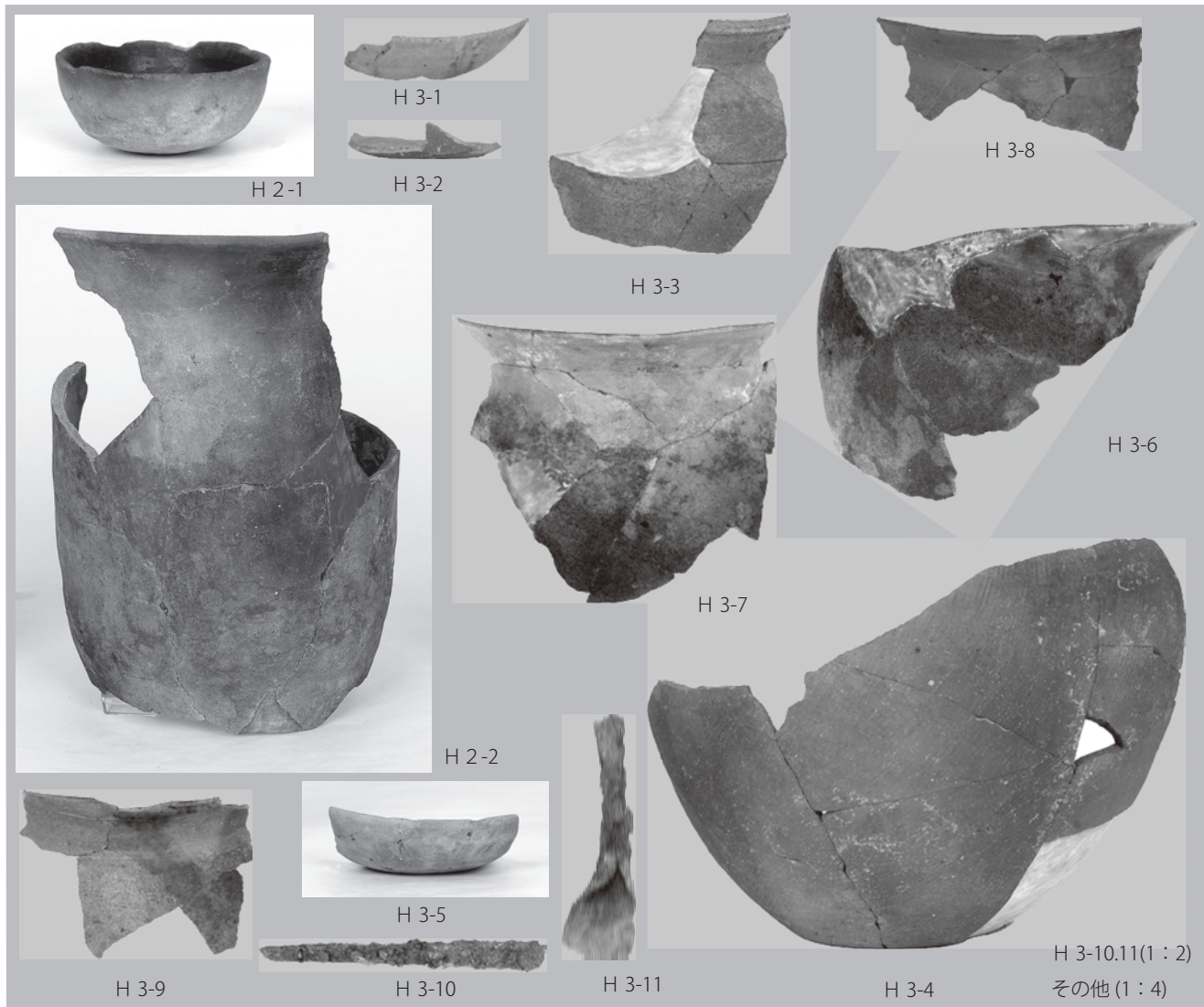
H 3号住居址掘方



H 3号住居址カマド



D 1号土坑



第1表 H2・H3号住居址出土遺物観察表

(単位 cm・g)

H2	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	土師器	坏	12.2	9.0	5.5	ヘラミガキ 黒色処理	ナデ→底部ヘラケズリ	完全実測	
2	土師器	甕	<20.0>	-	<28.5>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	
H3	種別	器種	法 量			成形・調整・文様		推定値()残存値<>	
			口径(長)	底径(幅)	器高(厚)	内 面	外 面	備 考	出土位置
1	須恵器	坏	<14.0>	-	<3.1>	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 火だすき痕	回転実測	II区
2	須恵器	坏	-	<7.2>	<2.5>	ロクロナデ 火だすき痕	ロクロナデ 回転糸切り	回転実測	ケン・II区
3	須恵器	甕	<15.4>	-	<13.0>	ロクロナデ 自然釉付着	ロクロナデ 体部に沈線	回転実測	I・II・IV区ホリ
4	須恵器	甕	-	12.1	<22.6>	当て具痕	平行タタキ 底部外周ヘラケズリ	完全実測	カマド・II区・ケン
5	土師器	坏	<14.0>	<10.2>	4.3	暗文	ヘラケズリ	回転実測	I区
6	土師器	甕	<18.4>	-	<18.0>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	I・II区・P1・P5
7	土師器	甕	<21.6>	-	<15.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	II区・カマド
8	土師器	甕	<20.6>	-	<7.2>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	II・III区・ホリ
9	土師器	甕	<21.0>	-	<9.4>	ヘラナデ	ヘラケズリ	回転実測	II区
No.	器 種	素 材	最大長	最大幅	最大厚	重 量	備 考		出土位置
10	刀子	鉄	<8.2>	<1.0>	<0.4>	<9.61>	茎部欠損		
11	不明	鉄	<7.0>	<2.0>	<0.7>	<10.02>	上部欠損か		IV区

報告書抄録

ふりがな	しばみやいせきぐん みなみかみなかはらいせきに							
書名	芝宮遺跡群 南上中原遺跡Ⅱ							
副書名								
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第265集							
編著者名	富沢 一明							
編集機関	佐久市教育委員会 文化振興課							
所在地	長野県佐久市中込2913 TEL0267-63-5321 FAX0267-63-5322							
発行年月日	令和元年(2019)11月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
しばみやいせきぐん みなみかみなかはら いせきに 芝宮遺跡群 南上中原遺跡Ⅱ	さくしながとろ 佐久市長土呂 763-1 他	20217	8	36° 17.24	138° 28.36	20190603 ～ 20190612	156	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
芝宮遺跡群 南上中原遺跡Ⅱ	集落址	古墳～ 平安	住居址 土 坑	3軒 1基	土師器・須恵器 鉄製品			
要 約	台地上に展開する古代の集落の一部を調査した。周辺の調査事例と同様に古墳時代から平安時代の 竪穴住居址が検出された。中でもH1号住居址は、住居南東コーナーにカマドを構築していた。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第265集

芝宮遺跡群 南上中原遺跡Ⅱ

令和元年(2019) 11月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込3056

文化振興課

〒385-0051 長野県佐久市中込2913

TEL0267-63-5321

印刷所 キクハラインク株式会社